

持統天皇の4年(690年)から1600年にわたって続けられ、20年ごとに65の社殿と約1600点の御装束神宝を新調する式年遷宮が伊勢神宮で盛大に執り行われた。第62回となった今回はとにかく話題が多く、新しい社殿にご神体を移す「遷御の儀」に首相として戦後初めて安倍晋三首相が参列したことや、鎌倉時代に無くなった遷宮用の宮域林ヒノキが復活し700年ぶりに使用されたことなどなど。しかし何と言っても驚くべきは、これまで883万人だった最高記録を軽々と上回り、1300万人に達すると予想される参拝者数である。そもそも“参拝者年間1000万人”は伊勢市などの悲願であったが、それを上回る遷宮ブームである。

この理由について著書「伊勢神宮」を記した京都産業大の所功名誉教授(法制文化史)は、ズバリ「東日本大震災が与えた心理的影響も考えざるをえない」と指摘する。実は今回の遷宮ブームには、バブルの余韻が残っていた20年前のそれとは違う決定的な特徴がある。それは若者や女性の参拝者が増えたことだ。しかも参拝者は通常レジャー施設も回遊する言わば観光客であるのに対し、彼らは神宮だけを目指すという。なるほど、不景気や天災などへの漠然とした不安の結果、彼らは神秘的なものへと向かうのか。そう言えばここ数年パワースポットブームが続いている。

しかし良く考えれば、新宮の神様は人間の力がなければ引越しも出来ない。自分で歩く力もない神様が果たして震災を鎮めるほどのパワーがあるのだろうか。聖書には、建てるのに46年も費やしたヘロデ神殿を巡るキリスト問答がある。

**「『先生、御覧ください。なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう。』**

**イエスは言われた。『これらの大きな建物を見ているのか。一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない。』」 マルコの福音書 13章 1-2節：共同訳**

がそれだ。実は人間が神を信じないのは昔からのことで、だからこそ業を煮やして神であるキリストがわざわざやって来たものの、彼が目にしたものは相変わらずの“人間崇拜”、或いは“モノ崇拜”であった。人の技術や文化は確かに素晴らしい。その結果ニーチェは「神は死ん

だ」と言い切り、日本人は今も「神を運び」、人間が神より偉いつもりでいる。しかしキリストは、被造物に過ぎない人間は全て滅んでしまうはかない存在であることを示し、人間の傲慢さと全能の神を恐れることを説いたのだ。だからと言って彼はただ人間に“いちゃもん”をつけているのではない。人間が素晴らしいからこそ、キリストは人間を救うために十字架に架かったからだ。ありがたいことに彼が復活し今も生きておられるお陰で、我々はいつでも彼に感謝し拝むことが出来る。素晴らしい伝統を持つ日本人が、本当の神のパワーを信じ、もっと強くなることを祈る。

2013-10-8

